

伝え合う力をはぐくむ道德指導の在り方

上峰町立上峰小学校 教諭 納富 義博

唐津市立浜玉中学校 教諭 秋山 いづみ

1 研究の趣旨

現代社会は、マスメディアの発達、とりわけインターネット・携帯電話などの普及などにより様々な情報が渦巻く社会へと変貌し、人々の価値観は多様化の一途をたどっている。また、人間関係の希薄化が進み、学校現場でもコミュニケーションがうまくとれない児童生徒が増加する傾向にあり、様々な問題が生じてきている。このような状況の中、家庭や地域の教育機能の低下、社会全体のモラルの低下が叫ばれ、家庭や社会に教育力の回復が望まれているが、それぞれの役割を十分に果たしているとは言えない。学校教育においては、自分の考えや思いをはっきりと相手に伝えるとともに、相手の考えや思いをしっかりと受けとめることのできる心の指導が求められている。

これらのことから、人とのかかわりの中で、人間関係を深めていく基本となる伝え合う力を育てていく必要があると考えた。ここで言う伝え合う力とは、道德教育において思っていることを素直に伝え、互いの意見を尊重し、深め合おうとする態度ととらえる。吉富芳正は、「伝え合う力」を「自分の気持ちや考えを適切に相手に伝え、生活上の問題を言葉で解決する力」と定義し、「その力を育てるとともに、他者を認め互いに尊重し合い、望ましい人間関係を構築する」⁽¹⁾と人とのかかわり方の重要性を述べている。道德の時間に、自分の考えを相手に話し、相手の考えを素直な気持ちで聴く話し合いの学習活動をさせることは、相手の存在を大切にしようとする態度を身に付けさせ、豊かな人間性をはぐくむことにつながるであろう。そして、ねらいに対する多様な考えを交換し、自分の考えを見つめ直すことが、道德的価値の自覚を深めることになると考える。

そこで、話し合いの場の工夫、話し合いのルール、資料開発の手立てを取り、道德性をより高めるような道德の時間の指導の在り方について研究を行った。

2 研究教科・領域等

小学校と中学校の道德の時間において、研究課題の解決に向かって研究を行った。

3 研究の成果

(1) 話し合いの場

事前アンケートの結果から、全体での話し合いでは多くの児童生徒が「緊張して話せない」「自信がないので話せない」ことが分かった。そこで、個人の考えをまとめさせる時間を確保し、考えを出しやすい少人数による話し合いを取り入れることにした。発問に対して考えをまとめ、少人数の話し合い後に学級全体での話し合いを行った。それぞれの話し合いの後、考えをワークシートに記入させることで、ねらいに対する個人の考えを確かにさせることができた。また、道德的価値の自覚の深まりを評価するために、児童生徒の変容を理解する視点を作成し、それを基にワークシートに記入した考え等を分析したところ、よりねらいに迫っていることが分かった。

小学校では、心情図を利用し、児童それぞれの判断の変化が目に見えるようにした。中心発問において、2人から6人の少人数の話し合いを取り入れ、判断の理由をブレインストーミング的に話し合わせた。そうすることで、児童は主体的な人とのかかわり方をもてるようになり、道德的価値の自覚を深めることができた。

中学校では、話すことが苦手な生徒には、話しやすい相手と2人組や4人組を組み合わせ、話したいと思わせるように配慮した。また、2色の名前カードを利用し、自分の判断を示させるようにした。少人数で互いの考えを話し合わせることで、主体的な人とのかかわり方をもち、道徳的な心情を高めることができた。

(2) 話し合いのルール

自分の考えを相手にはっきり伝え、相手の考えをしっかりと受け止める話し合いを行わせるためには、相手を尊重する態度が必要である。そこで、「相手の気持ちを考えて聴く」と「相手の気持ちを考えて話す」を小・中学校共通の視点とし、児童生徒の発達段階に応じた話し合いのルールを作成した。話し合いのルールを確認させることで、「分かりやすく話そう」や「最後まで聴こう」と意識させながら、話し合いに取り組ませることができた。その結果、児童生徒は安心して考えを話し、相手の考えを聴く話し合いができるようになり、互いを尊重し、考えを深め合おうとする態度をはぐくむことができた。

(3) 資料開発

児童生徒が、自分の価値観と照らし合わせて、本音を表しやすくなる資料を開発することにした。そこで、「道徳的価値に迫れるような葛藤場面を設定すること」「共感できる場面や状況を設定すること」「児童生徒の実態に合わせること」「親近感のもてる資料にすること」を小・中学校共通の視点とし、資料開発を行った。また、登場人物を児童生徒と近い年齢に設定し、日常生活で実際に起こり得る葛藤場面を描くことで、児童生徒が資料に自分の気持ちを重ねさせやすくした。資料に興味をもたせ、登場人物に共感させることで、道徳的価値の自覚を深める資料となるように工夫した。

小学校では、副読本に葛藤場面がある資料が少なかったため、自作資料や改作資料を開発した。その際、学級の実態を考慮し、ねらいを達成するための資料を作成した。児童は主人公の葛藤する姿に共感し、自分の考えを意欲的に話すようになった。また、児童に判断や理由を尋ねることによって、多様な考えを引き出すことができた。

中学校では、道徳の時間に自分の本音を語れない生徒が多く、主体的に考えさせられ、また、身近な素材の資料が少ないため、生徒が葛藤できるような場面を設定した資料「めざせ！GHS どうする浜太郎」シリーズを作成した。さらに、授業で使う資料以外に読み物資料を作り、事前に読ませることで、資料に興味や親近感をもたせるよう工夫した。そのため、道徳の授業の話し合いで、生徒は本音を出しやすくなり、他者の考えにも興味をもつことができた。

4 今後の課題

- (1) 伝え合う力をより定着させるための指導の工夫
- (2) 道徳の時間におけるより効果的な少人数の話し合いの工夫
- (3) 開発した資料の修正と、今後の活用の仕方

《引用文献》

- (1) 吉富 芳正 「なぜ今『伝え合う力』なのか」『特別活動研究』 2005年11月号 明治図書 p.7

《参考文献》

- ・ 押谷 由夫 「深まりのある『話し合い』への道しるべ」『道徳教育』 2005年1月号 明治図書